

紹介

奈良国立文化財研究所編

『平城京朱雀大路発掘調査報告』

周知のごとく、朱雀大路は、京南面中央の羅城門をくぐって京内に足を踏み入れただれもが、まず第一に眼にする雄大なメインストリートであり、東西市その他とともに、都城に不可欠の重要な構成要素の一つである。ところが、この京の背骨ともいべき朱雀大路に関する考古学的な調査は、近年における各京跡調査の盛行にもかかわらず、これまでどの京跡においても全く行なわれていないか、あるいは、平安京のように、実施されてもお見るべき成果をあげるには至っていないからである。

当該の平城京の場合も、事情はほぼ同じであり、わずかに一九六九～七一年における羅城門とその周辺の調査において、朱雀大路西側の築地と側溝が検出され(大和郡山市教育委員会『平城京羅城門跡発掘調査報告(第一次・第三次発掘調査)』一九七三年三月)、ま

た朱雀大路北端に位置する朱雀門の調査が一九六四年に行なわれた(第二六・一七次調査『奈良国立文化財研究所年報一九六五』)にとどまっておき、朱雀大路そのものの規模と構造を解明するには至っていないかった。そしてこのことが、現時点でも急速にすすみつつある開発の波に対応する保存修景計画の策定に、一定の支障となっていたと思われる。

かかる事情に鑑みて、奈良市は、「遺跡保存と、朱雀大路を生かした調和ある都市計画構想」立案の基礎的資料を得る目的で、一九七三年度の国庫金を受託し、奈良国立文化財研究所に調査を依頼した結果、一九七四年二～三月に発掘調査が実施されたのであった。

本報告書は、その成果を中心に、関連する調査成果もあわせて編集されたものであり、内容は次のごとくである。(カッコ内は執筆者)

- I、平城京朱雀大路発掘調査(狩野久・工楽善通・黒崎直・松沢亜生・森郁夫・岡本東三・吉田恵二・千田剛道・高瀬要一・岡田英男・今泉隆雄)
- II、前川遺跡発掘調査(岡本東三・吉田恵二)
- III、遺存地割・地名による平城京の復原

調査(岸俊男)

付章、航空写真による朱雀大路の調査

(黒崎直)

付図、遺存地割・地名による平城京復原

図「八千分の一」

Iは、右にのべた朱雀大路の発掘調査の報告である。調査地点は、六条条間路のすぐ北側にあたる。ここでは、朱雀大路の路面の形状、路面上の造作の有無、東西側溝の状況、築地調査の結果、左右京六条一坊二坪の状況等々の調査結果が詳述され、ついでその結果にもとづき、朱雀門・羅城門周辺における調査成果も援用しつつ、朱雀大路の方位を決定し、さらに路面敷、側溝、築地、大行などの規模を復原している。また、朱雀大路路面下から検出された下つ道の東西両側溝の規模、溝心々間距離、方位等も明らかにされている。たとえば、朱雀大路路面敷の幅は約七〇メートルと復原されており、延喜左右京職式京程条にみえる平安京の場合とはほぼ等しいが、溝、築地、大行の規模は、いずれも平城京の方が大きく、とくに両側溝は、平安京の場合が約一・五メートル(五尺)であるのに対して、約四メートルと大きく相違しており、これらの差が、全体として両京の朱雀大路築地

心々間距離に二丈の差を生じさせていること、つまり平安京の二八丈に対して、平城京は三〇丈とみるのが妥当であること等は、重要な成果の一つであろう。また出土遺物についても、瓦は官の生産品で、主に造京に用いられたものであると想定されること、右京六条一坊二坪で検出された古墳時代の溝からの出土品は、四〜五世紀の土師器の様相を知る好資料であること等が指摘され、ついで文献史料にもとづいて、朱雀大路の構造、街路樹、門、維持管理体制、機能もしくは本質について論じられている。

Ⅱの前川遺跡は、奈良県開発公社による前川の西折工事に際して発見され、一九七二年三〜四月、奈良国立文化財研究所によって調査されたものである。その位置は、羅城門跡の東約五〇〇メートルで、遺存地割による九条大路路面上にあたる。遺構は土壇と井戸が検出されたにとどまるが、両者から出土した土器類は、天平末年頃のもので、土師器を主体とし、多くは未使用品と考えられた。この遺跡の性格は、祭事に関連すると考えられている。

Ⅲおよび付図は、Ⅰの調査と関連して行なわれた調査結果をまとめたものである。かつて平城京保存調査会が行なった、遺存

地割にもとづく平城京の復原調査の成果（奈良市企画部企画課編『平城京の復原保存計画に関する調査研究』一九七二年、そのほか）を継承し、さらに補充・発展させ、その上に立って、平城京を全域にわたって、実際の土地に即して具体的に復原した最新の成果であり（付図）、かつ詳細な考察が加えられている（Ⅲ）。

たとえば、右京の丘陵部にも整然とした条坊街区が存在したことが、地割の上から確かめられたこと、道路敷地割は、宮前面（左右京一坊）の三〜九条に卓越し、他部分と様相を異にしていること、道路敷地割によって各路面を概測すると、各大路幅員間の相違の仕方は、平安京の場合とも一致する点が多いが、個々の路幅は、おおむね平城京の方が広いこと、各条・各坊の間隔はかなり長短があること、外京は本来一条から始まっていたと推測されること、遺存地割・地名から、京内外を流れていた諸河川の旧流路をある程度復原しうること、そのほか一々紹介する余裕はないが、遺存地割や地名のうち注目すべきものについて多々論じられていること、等々である。

その他多くの点につき示唆のある言及がなされているが、Ⅰ、Ⅱと同様に、わずかな

紙幅では、そのすべてにふれることはできず、読者各位が、自ら本報告書について確かめられることを、是非ともおすすめしたい。しかし以上に記した点のみからでも、平城京朱雀大路はもちろん、広く平城京全体に関する極めて重要な資料が豊富に提出されていることは、十分に窺えると思う。

さらに本報告書で解明もしくは提出された多くの点は、ひとり平城京にとどまらず、平安京をはじめとするその他の都城研究に影響するところが大きいと思われる。たとえば、朱雀大路の規模と構造、遺存地割から概測された各大路幅が、延喜式京程条に記される平安京の場合の数値と微妙に異なる点や、遺存地割にもとづく概測によると、各条坊の間隔にかなりの長短がある事実などは、本書の成果の一部にしかすぎないが、これだけでも、右のことは十分了解できるであろう。今後さらに機会をえて、平城京をはじめとする各京跡の調査が進められ、研究が深化されることを心より望みつつ筆をおきたいと思う。（一九七五・二・五）

（A判 四五頁 図面図版三五頁
一九七四年三月 奈良市）
（榮原永遠男 京都大学研修員）